

主 題：神からの警告
聖書箇所：アモス書 8章11節

今日は旧約聖書のアモス書から、一人の預言者アモスのことをごいっしょに学んで行きましょう。

二つの面から見て行きます。一つはこのアモスがどういう人物であったのかを見ること、そして、二つ目にアモス自身が語ったメッセージを見て行きます。というのは、アモスは非常に大切な神のメッセージを人々に語り続けたからです。それはまた、今の私たちにもチャレンジを与えてくれるタイムリーなメッセージです。

1. 預言者アモス

アモスはどのような人であったのか、彼の人物像を見ましょう。

1) 出身

1：1を見てください。「**テコアの牧者のひとりであったアモスのことば。これはユダの王ウジヤの時代、イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代、地震の二年前に、イスラエルについて彼が見たものである。**」とあり、彼がどこで生まれたのかが記されています。ここにあるようにテコアという所でした。当時、イスラエルは北と南に分かれていて、北王国のことをイスラエルと呼び、南王国のことをユダと呼んでいました。彼が生まれた「**テコア**」は南王国ユダの町です。イスラエルの地図を思い浮かべてください。エルサレムの東の方から南の位置に死海があるという位置関係ですが、エルサレムから約10キロ南に下ったところにあるのが、キリストがお生まれになったベツレヘムです。そこからまだ10キロほど下って行くと、そこにあるのが「**テコア**」という町です。そこで、このアモスは生まれたのです。

2) 職業

アモスは牧者でありいちじく桑の木を栽培していました。1節に「**牧者のひとりであった**」と記されています。「**牧者**」というと羊を飼っている人と私たちは連想しますが、実は、ここで使われている「**牧者**」ということばは非常に珍しいことばです。旧約聖書の中ではここともう一箇所Ⅱ列王記3：4だけにしか使われていません。そこでは「**モアブの王メシャは羊を飼っており、子羊十万頭と、雄羊十万頭分の羊毛とをイスラエルの王にみつぎものとして納めていた。**」と記されています。モアブは死海の東側の国です。「**モアブの王メシャ**」という人物に関して、彼は「**羊を飼っており**」とあります。「**牧者**」と同じことばが使われているのですが、これはわずかな羊を追っている羊飼いたちとは少し違います。このメシャは非常に大規模な畜産をしており、たくさんの数の羊をイスラエルに供給していることが記されています。ですから、そのことばだけを見るとアモスもたくさんの羊を飼っていたのではないのかと思われそうですが、どうもそうではなかったようです。

もうひとつ、この牧者に関してヒントになるのが同じアモス書7：12に「**アマジャはアモスに言った。先見者よ。ユダの地へ逃げて行け。その地でパンを食べ、その地で預言せよ。**」とあり、このベテルの祭司アマジャに対してアモスは14節で「**私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、いちじく桑の木を栽培していた。**」と答えています。ここで使われている「**牧者**」ということばは旧約聖書の中でここにしか出てこないことばです。ですから、正確にはよく分からないのですが、「**牧者**」ということばはあらゆる家畜を牧することを意味する一般的なことばであったと考えるゆえに、恐らく、このアモスは羊だけでなく他の家畜も同じように飼っていたのではないかと思われまます。14節には彼の職業についてもう一つ「**いちじく桑の木を栽培していた。**」と記されています。この「**いちじく桑の木**」というのは私たち日本人には非常になじみが薄いでしょう？桑の木というのは見たことがあるかもしれませんが。蚕の餌として私も子どもの頃よく見ていました。でもこの「**いちじく桑**」は私たちが連想するような木ではなく非常に大きな木です。もちろん桑科の木ですが、なぜ「**いちじく桑**」と言ったのか、いちじくのような実を年に3～4回実らせるので、そこから「**いちじく桑の木**」と呼ばれたのです。この木はアモスが生まれたテコアでは寒過ぎて育ちません。もう少し南の方、ヨルダンの低地や死海付近のオアシスの辺りでしか育たないのです。今でも、死海付近へ行くと確かに暖かいです。エルサレムで雪が降っても、死海付近ではかなり暖かさが残っています。ですから、その地域でこの「**いちじく桑の木**」が育ったのです。皆さんが覚えておられる通り、エリコの町に「いちじく桑」が出て来ます。恐らく、このテコアから暖かいヨルダンの低地や死海付近はさほど離れていませんから、アモスはそこに通って「**いちじく桑**」の世話をすることができたのです。水やりや今なら袋をかけるというようなことを連想しますが、いろいろな書を見ると、この実に傷をつけることによって甘みが増すというようなことが書かれています。ある人はそこに穴を開けることによって中の虫が出て来るとか、そのような話があるのですが、少なく

とも、そのような世話をする必要があったのではないかと思われ、多分、アモスはそのような世話をしていたのでしょう。そして、今見た7：14で「私は預言者ではなかった。預言者の仲間でもなかった。」と言っています。ということは、彼は、たとえば父が預言者であったとか、生まれながらに預言者として召されて預言者としての働きをしていたというのではなかったのです。一般的な「牧者」としての働きをし、そして、「いちじく桑」を栽培するという、そのような普通の仕事をしていたと彼は私たちに教えてくれるのです。

3) その当時の社会情勢

もう一度1：1に戻って、そこにこの当時の社会情勢を見ることができます。ユダの王の名前、また、イスラエルの王のことが記されています。「これはユダの王ウジヤの時代、イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代、地震の二年前に、イスラエルについて彼が見たものである。」。最初に「ユダの王ウジヤ」とあるのは、恐らく、アモス自身が南王国ユダの出身であったからかも知れません。アモスが神から召され用いられたとき、南王国の王はウジヤであり、北王国の王はヤロブアムⅡ世でした。ヤロブアムⅠ世は国が二つに分かれてからのイスラエルの最初の王でした。このような王が治めていた時にアモスは神の働きに召されたのです。しかも、おもしろいことが書かれています。「地震の二年前に」と記されています。この地震のことは正直、定かではありません。明らかではないのです。ただ、ゼカリヤ書14：5に「山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。」と記されています。それくらいしか記されていないので詳しいことは分かりません。ただ、歴史家ヨセフスは「この地震はウジヤ王が祭司たちに代わって香をたこうとして神殿に入って罪を犯したときに起こった出来事だ」と言っています。その出来事はⅡ歴代誌26：16に「しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、主に対して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香をたこうとして主の神殿にはいった。」と出てきます。「彼」とはウジヤ王のことです。恐らく、そのあたりで地震が起こったこと、そして、この地震は神からのさばきであったと歴史家は記しているのです。でも、そのことも私たちは詳しく知ることはできませんが、聖書には「地震の二年前に」と書かれていて、ゼカリヤもウジヤ王の時に地震があったと記しています。

4) 北王国イスラエルの靈的荒廃

そのような時代でしたが、その当時の北王国イスラエルは経済的に非常に発展していました。人々は物質的な繁栄を満喫していました。しかし、その反面、彼らの信仰は非常に荒廃していたのです。この国が分かれてからアッシリアによって滅ぼされるまでの約200年間、北王国を治めた19名の王様がいますが、何と19名ともみな悪い王様でした。みな神に逆らった王でした。ですから、そのように悪い王のもとにいたから、民も神に逆らったということも確かに言えるのです。ちなみに、南王国ユダには20名の王様がいて、その中の12名が悪い王であって8名が良い王でした。それに比べて北王国は良い王が一人もいなかった、そのような状態でした。

でも、その責任は王だけにあったわけではありません。というのは、靈的なリーダーであるはずの祭司も、人々に神に逆らうようにと勧めを為しているのです。このアモス書7章にベテルでのことが記されています。7：10-13「ベテルの祭司アマジヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わしてこう言った。「イスラエルの家のただ中で、アモスはあなたに謀反を企てています。この国は彼のすべてのことばを受け入れることはできません。：11 アモスはこう言っています。『ヤロブアムは剣で死に、イスラエルはその国から必ず捕えられて行く。』」：12 アマジヤはアモスに言った「先見者よ。ユダの地へ逃げて行け。その地でパンを食べ、その地で預言せよ。：13 ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王宮のある所だから。」と、この箇所からアモスがベテルで主のメッセージを伝えていたことが分かります。しかし、それに反対したのはだれでしょう？アモスに「ここから出て行け」と命じたのは何と祭司アマジヤであったと記されています。この北王国はこれほど靈的に荒廃していたのです。

しかし、よく考えてみると、どのような時代であっても、人々が社会からどのような影響を受けていると、問題はやはり個人だと思いませんか？たとえ、国がどんなに悪くても、たとえ、自分の教師がどんなに悪くても、大切なのは自分自身です。私たちの責任は人間のだれかのことばを信頼するのではなく、一人ひとりが神のおことばに信頼を置くことです。私たちの責任は「神のおことばに対して忠実であるかどうか」です。本当に神が言われているのかどうか、神のことばを使って自分の言いたいことを言うのは容易いことで、そのような人はたくさんいます。このようなことは人に聞かせたくないからとして、敢えてそこを曲げて語る人もたくさんいます。神のメッセージは厳しいです。神のメッセージは私たちの心を責めます。でも、神のメッセージだからそのとおりに語らなければいけないのです。それは語る者に与えられる責任であり、その学びを受ける者の責任は、それは本当に聖書が語っているとおりなのかどうかを真剣に探ることです。そうでなければ、いろいろなことによって惑わされてしまいま

す。イスラエルの状態は確かに経済的には豊かでしたが、霊的には大変な状態にあったのです。

この状態をずっと見て行くと、ある国のことが浮かんで来ます。もちろん他にもあるでしょうが、私たちの国日本です。経済的には非常に成長している、でも、霊的にはどうでしょう？神に対してはどうでしょう？これほど神に逆らっている国は二つと見ないというほど霊的に荒んだ国、悲しいことに、それが私たちの国です。そのことはこの後のアモスのメッセージを見て行くことによっても明らかになって行くような気がします。

5) アモスの召し

今私たちは、アモスという人物がどこで生まれ、どんな仕事をして、また、彼が働きを為した時の社会情勢を見て来ました。このような中で神はアモスを召したのです。このアモス書7：15に「**ところが、主は群れを追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。』**と。」と記されています。彼が言っていることは、このように普通の仕事をしていた私に、神が働いて私を召されたということです。彼の神から与えられた務めは、北王国イスラエルに行ってこの神のメッセージを伝えることでした。そして、彼は北王国に行くのです。ちょうど、あのエリヤやエリシャもそうであったように、そしてホセアもそうであったように、このアモスも北王国イスラエルで預言をした預言者の一人だったわけです。

2. アモスが語ったメッセージ

次に彼が語ったメッセージを見て行きましょう。

1) さばきの警告

ひと言で言うなら「あなたの罪はさばかれる」というのが彼のメッセージでした。ですから、このアモス書を見て行くと、9章までの間に記されていることはさばきに次ぐさばきです。アモスは非常に大胆に人々にメッセージを語りました。最初は隣国への警告でした。1章から2章の初めまでを見ると、そこにはダマスコに対して、ガザに対して、ツロに対して、エドムに対して、アモンに対して、モアブに対して、ユダに対しての警告が記されています。そこには「必ずあなたたちの罪はさばかれる」と記されています。そのときはイスラエルの人々は彼のメッセージを喜んで聞いたでしょう。イスラエルの隣国にさばきが下る、そら見たことかと、恐らく、人々は彼のメッセージを受け入れたことでしょう。ところが、2：6あたりからその矛先が隣国から自国イスラエルに向けられて行くのです。アモスはイスラエルに対する警告を発します。イスラエルの罪がさばかれるというメッセージを語り始めて行くのです。そのころから人々の彼に対する反発が強くなって行きます。3－6章まではイスラエルに対する警告のメッセージです。イスラエルはさばかれるというメッセージです。

そして、7章になると、今度はさばきに関する幻の話が出て来ます。いなごがあつて、燃える火があつて、重りなわがあつて、夏の果実があつて、柱頭を打つといった五つの幻が記されています。つまり、2：6以降、アモスがしたことは、遣わされた北王国イスラエルにあつて、この国の罪は神によってさばかれるという、そのメッセージを語り続けて行くことです。今日、私たちが見たいのは第4番目の幻、「夏の果実」、くだもの幻です。8章に出て来ます。8：1から主とアモスのやり取りがこのように記されています。1－3「**神である主は、私にこのように示された。そこに一かごの夏のくだものがあった。：2 主は仰せられた。「アモス。何をみているのか。」私が、「一かごの夏のくだものです。」**と言うと、**主は私に仰せられた。「わたしの民イスラエルに、終わりが来た。わたしはもう二度と彼らを見過ごさない。：3 その日には、神殿の歌声は泣きわめきとなる。——神である主の御告げ。——多くのしかばねが、至る所に投げ捨てられる。口をつぐめ。」**。何が記されていますか？神のさばきがイスラエルに下るということです。この夏のくだもの幻によってアモスが教えられたことは、ちょうどそのくだものが熟するように神のさばきのときがまさにやってくるようとしているということです。「**多くのしかばねが、至る所に投げ捨てられる**」、多くの人が死を経験すると言います。その前を見ると「**神殿の歌声は泣きわめきとなる**」とあり、喜びが悲しみに変わると言います。なぜなら、さばきが下るからです。そして、9章の初めを見ると「**私は、祭壇のかたわらに立っておられる主を見た。主は仰せられた。「柱頭を打って、敷居が震えるようにせよ。そのすべてを頭上で打ち砕け。わたしは彼らの残った者を、剣で殺す。彼らのうち、ひとりも逃げる者はなく、のがれる者もない。」**と、非常に厳しい神のさばきが記されています。ですから、この8章の最初を見ても、9章の初めを見ても、間違いなく下るとされる神の審判、神のさばきが記されているのです。

2) なぜ、このようなさばきがくだされるのか？

(a) 罪を悔い改めることをしなかったから

8：4－6を見てください。「**聞け。貧しい者たちを踏みつけ、地の悩む者たちを絶やす者よ。：5 あなたがたは言っている。「新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物売りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。エパを小さくし、シェケルを重くし、欺きのはかりで欺こう。：6 弱い者を銀で買い、貧しい者を一足のくつで買い取り、くず麦を売るために。」**とあります。もうすでに、私たちが見て来たよう

に、イスラエルの罪はいろいろとあって今からそれを見ますが、彼らはそのように罪を犯しているながら悔い改めることをしなかったのです。何度も何度もさばきが来るというメッセージを聞いていても、彼らはそれによって悔い改めることをしなかったのです。

(b) 隣人愛に欠けているから

4節と6節を見て、二つ目の彼らの罪は隣人への愛に欠けているということです。4節に記されていることばは5：11のみことばを彷彿させます。「**あなたがたは貧しい者を踏みつけ、彼から小作料を取り立てている。それゆえあなたがたは、切り石の家々を建てても、その中に住めない。美しいがどう畑を作っても、その酒を飲めない。**」、つまり、彼らは貧しい人たちに対してあわれみを示さないのです。自分たちさえよければそれでいいという、そのような思いを持っていたことを見ることができます。8：6に「**弱い者を銀で買い**」とありますが、これは自分の奴隷にするためです。弱い者たちを助けるのではなく、彼らを安い料金を買って自分の奴隷にしようとするのです。貧しい者たちのことなど全然思いやっていません。しかも、レビ記にあるみことばを見るとこのことは罪です。レビ記25：39に「**もし、あなたのもとにいるあなたの兄弟が貧しくなり、あなたに身売りしても、彼を奴隷として仕えさせてはならない。**」と記されています。でも、そのことを平気でしているのです。ですから、このように見たときに、イスラエルの裕福な人々が考えていることは自分さえよければそれでいいということだけで、周りの人々に対して、隣人に対して愛を示すことがないのです。また、皆さんもよくご存じのように、このことは新約聖書の中でもヤコブが警告しています。ヤコブ5：2-5「**あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、：3 あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。：4 見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。：5 あなたがたは、地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、殺される日にあたって自分の心を太らせました。**」。つまり、隣人に対してあわれみの心を全然示さないのです。

(c) 偶像礼拝の罪

三つ目に見るのは、偶像礼拝の罪です。彼らは偶像を礼拝するのです。アモス8：5に「**あなたがたは言っている。「新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物売りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。エパを小さくし、シェケルを重くし、欺きのはかりで欺こう。」**とありますが、まず驚かされることは、彼らが新月の祭りや安息日が早く終わることを望んでいるということです。ここにいる皆さんは今、早く礼拝が終わるようにと思っただけはおられないでしょうが、自分のしたいことが他にあるから早く終わってほしいということはあるかもしれません。彼らは商売ができるからと商売に関心が向いていました。しかも、非常に欲深かったのです。彼らは平気で不正を行なうのです。「**欺きのはかりで欺こう**」と書かれています。不正確な秤によってだまそうと言うのです。この「**エパを小さくし**」の「**エパ**」とは穀物や粉を測る容器です。1エパは大体40ℓぐらいだと言われています。それをわざと小さくするのは、そうすれば少し得をします。そうして不正を働くのです。正しい秤ではかろうとしないのです。また、「**シェケルを重くし**」とあります。この当時はご存じのように、代金を受け取る時はお金ではなく金銀をその請求される目方、重さで支払ったのです。私たちが連想するのは、天秤のようなものの片方に重りを置いて、それに見合う金銀を支払うというものですが、ここで彼らがしていたことは「**シェケルを重くした**」、つまり、支払いの重さを実際よりも重くすることで、余計に金銀を得ていたのです。重りに不正があったら、本当は1kgで済むところを1.2kgとするから、支払う者はその余計な分の金銀を払わなければいけなかった。このようなことをして彼らは不正に富を得ていたのです。

実は、これはみことばに反することです。みことばはそのようなことに対して「**してはならない**」と警告しています。申命記25：13-16に「**あなたは袋に大小異なる重り石を持っていてはならない。：14 あなたは家に大小異なる枡を持っていてはならない。：15 あなたは完全に正しい重り石を持ち、完全に正しい枡を持っていてはならない。あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生きるためである。：16 すべてこのようなことをなし、不正をする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。**」と記されています。ですから、彼らがしていたことは明らかに罪でした。神の教えを全く無視していたのです。しかも、アモス8：6の最後に「**くず麦を売るために**」とありました。「**くず麦**」とは「**もみがら**」のことです。彼らはもみがらを普通の麦とを混ぜて、余計な重さを加えて不正に売っていたのです。今、私たちの周りで起こっている様々な不正な事件を見たとき、その当時と少しも変わらないことに気付きます。どの時代になろうと、どの国であろうと、みな、何とか不正をして少しでも儲けようとしているのです。欲深いのです。ですから、このみことばを見ると、イスラエルの人々はお金の亡者でした。なぜなら、彼らの神はお金だったからです。「**金**」に仕えていたのです。そのために彼らは生きていたのです。このような生き方をしていた者たちだから、神はその者たちに対して怒りを持たれたのです。彼らは偶像崇拜者です。神以外のものを愛し、神以外のものを崇拜していたからです。

(d) 神に対する愛に欠けていたから

そしてもう一つ、四つ目に見るのは5節に「**新月の祭りはいつ終わるのか。私たちは穀物を売りたいのだが。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいのだが。**」とある通り、彼らは恐らく神を信じていないし、神に逆らい続けていたにもかかわらず、このようなイスラエルの祭りを守っているのです。「**新月の祭り**」を守っているのです。これは月の初日、その日は仕事や商売を執り行なってはならない聖なる日なのです。民数記10：10や28：11にそのことが記されています。10：10「**また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの例祭と新月の日に、あなたがたの全焼のいけにえと、和解のいけにえの上に、ラッパを鳴り渡らせるなら、あなたがたは、あなたがたの神の前に覚えられる。わたしはあなたがたの神、主である。**」、28：11「**あなたがたは月の第一日に、主への全焼のいけにえとして若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の傷のない雄の子羊七頭をささげなければならない。**」。月の第一日に全焼のいけにえをささげなさいとあります。「**新月の祭り**」は神が定めたものです。彼らはそれを行なっているのです。行なっていないのなら分かります。でも、彼らはそのような祭りを行なっているし、安息日も守っているわけです。しかも、4：4には「**…朝ごとにいけにえをささげ、三日ごとに十分の一のささげ物をささげよ。**」とあり、彼らがこのように行なっていることを見ると、彼らは非常に熱心です。また、5：22から見ると、そこには様々な儀式を彼らが守り行なっていたことが分かります。「**たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。**」とこのような儀式を守っていたのです。これらをまとめるとこのようになります。このイスラエルの人々は外見上はどこから見ても非常に宗教的だったのです。なぜなら、彼らは新月の祭りも守っているし、安息日も守っているし、そして、いけにえもささげているし、ささげ物もしている、そして、いろいろな儀式を守っている。その観点から言うなら彼らは本当にすばらしい神を敬う信仰的な人々です。

しかし、彼らの信仰は形骸化し、また、世俗化されていました。非常に偽善的だったのです。特に、今少し触れましたが、4章にそのことが記されています。4：4-5「**ベテルへ行って、そむけ。ギルガルへ行って、ますますそむけ。朝ごとにいけにえをささげ、三日ごとに十分の一のささげ物をささげよ。5 感謝のささげ物として、種を入れたパンを焼き、進んでささげるささげ物を布告し、ふれ知らせよ。イスラエルの子ら。あなたがたはそうすることを好んでいる。——神である主の御告げ。——**」、確かに、彼らはこのように見かけだけは宗教的なことを行なっていたのです。ところが、6節には「**わたしもまた、あなたがたのあらゆる町で、あなたがたの歯をきれいにしておき、あなたがたのすべての場所で、パンに欠乏させた。それでも、あなたがたはわたしのものに帰って来なかった。——主の御告げ。——**」とあります。つまり、そのように確かに外面上は信仰的な行ないをしているけれど、そこに心が全然伴っていない彼らに対して、神はさばきを下さすと言われたのです。ですから、「**パンに欠乏させた。**」、彼らはパンにおいて食料において非常にひもじい思いをすることになったのです。その後、7節を見ると「**わたしはまた、刈り入れまでなお三か月あるのに、あなたがたには雨をとどめ、一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった。一つの畑には雨が降り、雨の降らなかった他の畑はかわききった。**」、神はそのような自然的な災害をもたらされると、そのようなことが記されています。ですから、このようにみことばを見たときに、イスラエルの人々は非常に外面的には信仰的だったけれど、彼らには神に対する愛が欠けていたのです。先祖から命ぜられたことを行なってはいます。しかし、神が最も関心を払われる心の部分に問題があったのです。

このように見たときに、私たちははっきりと覚えなければいけないと思います。私たちは何のために奉仕をし、何のために聖書を読み、何のために祈り、何のために礼拝に行くのか、そのことを考えていなければいけないのです。イスラエルの人々は神のためではなかったのです。その行なっていることによって、人々の前で自分がどれほど信仰的であるかを見せびらかすのです。見ているところが全然違ったのです。だから、神は彼らの目を覚まさせようと様々なききんを与えられた。それでも彼らは目を覚ますことがなかったのです。確かに、彼らは守るべきことを行なっていました。でも、神の関心は私たちの心です。そのことを私たち今の時代のクリスチャンももし忘れてしまうなら、彼らが神の前に大きな失敗を犯したように、私たちも誘惑に負けて、そのような罪に陥ってしまうことがあります。形式的で、また、世俗的、偽善的な信仰です。

3) 最後の警告

アモス8章に戻って、8：7「**主はヤコブの誇りにかけて誓われる。**」、神がこのように言われるときは神がこれから必ずこういうことを為すということが言われるのです。神ご自身の誓いです。3：13を見るとここには北王国のことを「**ヤコブの家**」と呼んでいます。「**聞け。そして、これをヤコブの家に証言せよ。——神である主、万軍の神の御告げ。——**」と。ですから、恐らく神は、わたしはこれから誓ってこれらのことをする、これからすることは確実に起こるのだということを明らかにするために、このように言われることが度々あるのです。ですから、7節で「**ヤコブの誇りにかけて**」と言われたのは、イスラエルの人々がわたしに対して為して来たこと、わたしに対して罪を犯して来たこと、それゆえに、わた

しはその罪に対して確実に報いを与えると、そのことです。イスラエルの人々が神に対して犯して来た罪に対する当然の報い、そのことをこの7節以降にアモスは記しているのです。必ず起こることである、神の名によって誓われるゆえに絶対に曲げられないことがない。絶対者なる神の権威に基づいて約束が与えられている、それゆえに、これらのことは必ず起こると言うのです。

a) 自然界のききん

4 : 8 - 10 「わたしはまた、刈り入れまでなお三か月あるのに、あなたがたには雨をとどめ、一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった。一つの畑には雨が降り、雨の降らなかった他の畑はかわききった。:8 二、三の町は水を飲むために一つの町によるめいて行ったが、満ち足りることはなかった。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。——主の御告げ。——:9 わたしは立ち枯れと黒穂病で、あなたがたを打った。あなたがたの果樹園とぶどう畑、いちじくの木とオリーブの木がふえても、かみつくないごが食い荒らした。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。——主の御告げ。——:10 わたしは、エジプトにしたように、疫病をあなたがたに送り、剣であなたがたの若者たちを殺し、あなたがたの馬を奪い去り、あなたがたの陣営に悪臭を上らせ、あなたがたの鼻をつかせた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。——主の御告げ。」、8 : 8 - 10 「このために地は震えないだろうか。地に住むすべての者は泣き悲しまないだろうか。地のすべてのものはナイル川のようにわき上がり、エジプト川のように、みなぎっては、また沈まないだろうか。:9 その日には、——神である主の御告げ。——わたしは真昼に太陽を沈ませ、日盛りに地を暗くし、:10 あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたのすべての歌を哀歌に変え、すべての腰に荒布をまとわせ、すべての人の頭をそらせ、その日を、ひとり子を失ったときの喪のようにし、その終わりを苦い日のようにする。」、8節に「ナイル川のようにわき上がり」とあるのは、ちょうどナイル川の氾濫によって彼らが経験した様々な苦しみ、悲しみを指しているようです。また、9節に「わたしは真昼に太陽を沈ませ、日盛りに地を暗くし、」とあるのは日蝕のことです。歴史書の中に紀元前784年と763年に日蝕が起こったことが記されています。ですから、それを見た人々は非常に恐れたわけです。ですから、このことばを聞いてそのときのことを思い出したのかもしれませんが。また、10節から後を見ると、空前の悲しみが彼らを襲うとあります。例のない大変な苦しみ、また、悲しみが人々を襲うと言います。先ほども話したように、これまでも神は人々の目を覚ますためにいろいろな機会を与えてくださいました。いろいろなききん、いろいろな苦しみ、いろいろな災いをもって、彼らが目を覚ますようにと神は働いて来られたのです。

b) みことばのききん

8 : 11からは最後の警告が記されています。「見よ。その日が来る。——神である主の御告げ。——その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。」と、何のことでしょう？今まで見て来たように、イスラエルは神のおことばを拒みました。何度も何度も神は彼らに悔い改めの機会を与えたにもかかわらず、彼らはそれを拒み続けたのです。その結果、主のことばを聞くことのききん、そのようなききんがやって来るのだと警告しているのです。もう神は彼らに対してお答えにならないと言うのです。彼らが神を求めても、その説明も、赦しも、希望のことばもないと言うのです。つまり、救いの恵みを逸してしまうということです。

この後に、ダン、ベエル・シェバのことが出て来ます。偶像を崇拝している町々です。彼らは倒れて二度と起き上がることができないとあります。最後に神が言われた警告は、これまで神は繰り返し繰り返し人々の罪を赦そうとされましたが、その赦しを拒み続けて行くなら、たとえあなたが望んでも、あなたには救いが与えられないときがやって来るということです。神はもうお答えにならない、神が希望を与えることはないのです。救いのチャンスを逸してしまったら救いの機会はないのです。その日がやって来ると言うのです。救いのチャンスを逃してしまう、これほど大きな悲劇はないでしょう？アモスが警告したことはそれです。何度も何度も、神はあなたたちに赦しの御手を差し伸べた、けれども、あなたたちはそれを拒み続けた、そのように救いを拒み続けるなら、救われない、その救いを得ることは決してできないときがやって来ると、その警告をアモスはここでしているのです。

私たちが願うことは、私たちの愛する者たちにそのようなことが起こらないことです。神の救いを逃してしまうなんて耐えられません。自分の愛する者たちが永遠の地獄で苦しみ続けるなんて考えたくもないことです。でも、これは現実なのです。皆さん、神は今私たちに救いの機会を与えてくださっていますが、それを拒み続けて行くなら、その人に残されているのは永遠のさばきでしかないのです。これは当然の報いです。そのことを最後にアモスは警告しているのです。

でも、驚くべきことは、このような最も悲惨な警告をした後でも、神は彼らに救いの機会を与えようとしてくださっています。まだ、その機会を与えようとしているのです。というのは、9 : 11から最後までを見ると、もう一度、神に対して罪を犯さなかった者たちにすばらしい祝福があると、最後にその約束が記されているのです。主を畏れる者たちへの希望が記されています。

今、私たちはこのアモス書を簡単に見て来ました。どの時代でも、だれが語っても、神のメッセージは同じだと思いませんか？アモスが語ろうと、オバデヤが語ろうと、ホセアが語ろうと、イザヤが語ろ

うと、そしてあなたや私が語ろうと、メッセージは同じです。神はまだ罪人に救いのチャンスを与えておられます。皆さんの愛する者たちが救われるチャンスはまだあるのです。もちろん、私たちが彼らを救うわけではありません。私たちにできることは福音の種を蒔き続けることです。彼らのためにとりなし続けることです。しかし、私たちクリスチャンが覚えておかなければいけないことは、「もうこれまで」というそのときがやって来るということです。最後の一人が救われるときがやって来るのです。そのときに、私たちの愛する者たちが残されるなど、そのようなことがあってほしくはありません。アモスのメッセージは私たちクリスチャンに対して大きなチャレンジを与えてくれます。私たちは残されたわずかな日々、このすばらしい救いのメッセージを携えて出て行くことです。まだ、神の赦しがあるのですから。そして、まだこの救いを受けておられない方たちには、この警告は切実な警告です。明日まで延ばせばいいとか、あさってまで延ばせばいいというものではありません。いつさばきが来るか私たちに分かりません。望んでも救いが与えられないときがやって来るのです。その意味で、この1年も神が私たちを守り続けてくださり、このようにいろいろな形で用い続けてくださったことを感謝しましょう。私たちが望んでいた結果が現われていなくても、私たちはそれによって怯むことなく、語らなければいけないメッセージを語り続けて行きましょう。このイエス・キリストだけが救いであり、このイエス・キリストだけが救い主です。これだけが希望をもたらすメッセージです。明日に延ばすのではなく、こうして与えられている今日、このすばらしい救いのメッセージを伝えることです。そうして出て行ってください。私たちの周りにはこのメッセージがどんなにすばらしいのかを知らずに、永遠の滅びに向かっている人たちがあふれています。私たちに大きな責任があるのです。